吾人は教育者に非ざるも教育の本旨を研究するは甚だ必要なるを信ず。然り而して以上記する所の如きは、唯だ余の平素思考するものの一端にして、以て教育の本旨を知るに足るものとは信ぜず。且つや編輯の期日切迫せるに際し詳細余の意を盡す能はず。讀者其蕪雜なるを諒せば幸甚。

雜錄

兩筑修學旅行日記（承前）

教授　益間益三

○十日。晴。福岡に在り。午前八時。職員生徒一同。箱崎神社に詣る。社は應神天皇、神功皇后を合せ祀り。配するに武内宿禰を以てするもの。博多の東北半里に在り。博多を出て丶。路亂松欝蒼の中に入るを。千代松原と稱す。即ち昨至りし東公園是れなり。植うるに唯松を以てし。其幾万株なるを知る可からず。此れより北。海に沿ふて數里皆然りと云ふ。翠色白砂と相映ず。頗る佳觀とす。松梢疎なる處に至りて。人家數十煙。博多灣に面するを。箱崎村とす。神社は路の右に在り。華表を夾み。左右紋石を以て短垣を造れり。既に華表に入る。老松矗立。森々穆々。人をして肅然敬を起さしむ。數十歩にして。閣門あり。小早川隆景の築きて以て献せし者なり。中央の額に。敵國降伏の四字を書す。延喜の宸筆と係ると云ふ。過きて而して正殿の前に至る。其構造。雄傑廣敞にして。大に古色あり。皆整列。頓首肅拜す。嗚呼。神后の征韓。獨り我が武威を海外に輝かせし而已ならず。三韓の我に屬せしより。船腹を乾かさずして。我に朝貢し。其間に於て。文學技藝。前後彼れより我に輸入し。以て我國開化の一大段落を成すに至れり。文學に志す者の。當に記憶すべきもの。賀來教授。神官に就きて。社内の藏物を觀る。

其內歌卷一冊あり。天正六年。公卿數人。神社よ詣りて詠ずる者を集めたるなり。此公卿は。蓋し當時周防山口の大內氏に寄食せし者ならん。又閣門に揭げる宸筆の原御書は。紺紙に金泥を以て書せられたる者にして。其枚數。三十七とす。當時御齡の數に由ると云ふ。而して字形至りて小なるものにして。今の門に揭げたる者は。之を大字に改めたる者なり。又豐臣秀吉の敎書。及び和歌あり。天正十六年。六月。秀吉。九州を征伐し。千代松原に陣せしとき。此神社に詣り。二首の和歌を詠ぜり。一に曰く。千登勢遠毛。太々美伊禮遠久。波古佐遣能。松示花左久。折示合波也。其二に曰く。安津遣日示。古能木乃毛登示。太知與禮波。波乃音壽留。松風曾吹久。蓋し。古より神領ありしに。戰國の紛亂を經て。其形跡を亡すに至りしに。後。秀吉の朝鮮を伐つ時。更に之を定めたりしならん。當時秀吉の。此社の坐主に與へし書に云く。筑前國糟屋郡。社家分の內五百石事。今度以檢地上。令寄附訖。全可社納者也。文祿四年。十二月日。印。箱崎八幡坐主法印。神官に就きて觀るもの。大略此の如ゑ。須臾にして。社を出づ。西望すれば。一面博多灣とす。卽ち弘安中。蒙古の兵を殲せし處なり。當時。彼れ趙宋の孤兒寡婦を恐嚇せし所の技倆を挾み。以て我が男兒國に及ばさんと欲し。妄に海を蔽ふの大軍を發して。以て來り寇せしに。鎌倉の執權北條時宗。只斷の一字に據り。終に彼れが十萬の師を屢ゑゝたり。壯且盛と謂ふ可し。此事や。中外の史に昭々として。三尺の童子と雖も。皆之を知らざるはなし。爾來五百有餘年。物換り星移り。今や則ち海外諸國と交を結び。殊に淸國。卽ち蒙古の繼續者との如きは。益々善隣を講じ。唇齒輔車の交を固くせざる可らざるの秋となれり。然り而して。今又遽に元寇紀念碑を設けば。或は以て徒に彼れの感情を傷はざるを得んや。既にして皆歸路に就き。直に往きて福岡尋常中學修猷館を觀る。二三の敎員。敎場の授業を參觀す。午後。隨意各處を游觀す。敎員五六名。校長よ伴ふて。市

内簀子街江藤某氏を訪ひ。其藏する所の古器物、古書籍を觀んことを請ふ。某欣然として之に應ず。其藏する所。數十百種に下らず。其中に就き。之を略記するに。石刀。石鏃。及鏡。鉾。皆紀元前の物に係る。千年外の祭器。花瓶。石棺。東大寺の卓子。都府樓の瓦硯。源平以前の鞍。及蒙古の鈴。朝鮮の古劔の如き。最も目に屬せり。其書籍の最も古きものを擧れば。正平本の論語。宇治興聖寺の爾雅。金澤文庫の孟子。慶長版の家語等。其他一々記するに暇あらず。而して之を藏するの一室は。棟梁柱桷等。皆古昔有名なる神社佛閣頽壞の餘を收拾して。以て之を構造せり。古色掬す可き。其内に入れば。人をして太古の世に生ずるの想を起さしむ。秋月教授。從容として主人に問ふて曰く。足下古を好む此の如し。而して此物。永く之を子孫に傳へんと欲するや。主人哂て曰く。僕古を好で。以て我が生を終る而已。之を保護すると。否ざるとの如きは。僕の預り知らざる所なりと。皆其達觀に服せり。款談して辭し去る。西する半里にして。荒戸街に至る。路右に折れて。坂あり。上れば則ち。福岡西公園なり。地頗る高敞にして。植うるに松數十株を以てす。松間より東北望。博多灣を一眸の中に集む。東岸一里。萬松叢生して。薺の如きは。嚮きの箱崎なり。其北。高巒海に臨で聳立するは。立花山とす。灣と玄海との間を隔絶して。青松白砂。一帶海波を横ぎりて。南に走るものを。海中道(ツミノナカミチ)と曰ふ。其南を志賀嶋とし。又其西南。海中に突立するものは。玄海嶋なり。古名鷹島と曰ふ。往時元虜の據りし處。而して福岡市全部は。灣の南岸に横はり。人家一帶。水に接して簇起せり。船舶の灣中に出入するもの。斜陽暮煙の間に隱見して。風景極めて佳なりとす。古人此景を評して曰く。天橋を奴僕視す可しと。蓋し溢美に非ざるなり。松間に茶店四五あり。乃ち一店を占めて憩ふ。茶を喫するの間。暮氣凛然として至れり。乃ち去りて旅館に歸る。此日。他の一行。縣廳學務員の誘を以て。灣頭に設る所の棧橋。及鐵工場。養鹽場等を觀た

人。此夜福岡縣知事。雞卵數百顆を贈り。以て我が一行の勞を慰せり。先發者志水余田二氏。午後二時を以て。歸途に上れり。

○十一日午前六時。福岡市を發し。博多停車場に至り。皆瀛車に上る。獨り杉山敎員。疾を獲て。福岡の旅館に淹留せり。瀛車已に發す。曉雨涔々として下る。雜餉隈停車場を經て。左四王子山を顧る。山の南端を岩屋と曰ふ。高橋紹運の城址の在る所なり。紹運世々大友氏に事ふ。天正中。紹運。大友氏の爲めに此城に據る。嶋津氏。大兵を以て來り圍む。紹運固く守る三旬。刀折れ矢盡き。終に自殺せり。紹運は立花宗茂の實父なり。既にして寶滿山の頭を四王子山の南に見る。顧望の間。肩を出し。又胸を現はし。其全身を露はすに至るときは。已に二日市停車場に達せり。而して雨未だ歇まず。皆車を捨てゝ。將に太宰府に至らんとす。雨を衝きて行く。半里餘にして達す。街の東極に大石華表あり。華表を過ぎて。路左に折る。此より以北を。菅廟の境內とす。池あり。方十四五丈。水太だ淸潔。中央。二橋を連架するを皷橋と曰ふ。狀其名の如し。池中。鴛鴦あり。游泳自如。太だ人に馴る。而して大楠樹數株。地勢を占めて雄立す根蟠まり枝張り。以て百牛を蔽ふ。蓋し千年外の物ならん。北する數十武。茶店路を夾む。多く飛梅餅の招牌あり。以て客を延く。此を過ぎて少しく北すれば。菅公の廟あり。廟の左右皆植うるに梅を以てす。蓋し數百株に下らず。皆百年の古樹。老幹槎枒。枝皆佶倔。眞に歲寒を侵すの風格あり。以て公の德を標するに似たり。所謂飛梅は。廟の東に在り。繞らすに短墻を以てして。之を護す。而して廟前一面。敷くよ砂石を以てし。洒然點塵を見ず。相與に廟前に整列して。禮拜す。生徒捧銃の式を行ひ。威儀肅々たり。公は我邦文學の宗たり。生徒の感想。亦知る可し。抑も。昔時始て太宰府を置きしは。其年代詳かならず。日本紀に。推古天皇。十七年。夏四月。筑前太宰府奏上言。百濟僧。道頊。惠

彌、七十餘人。泊于肥後國葦北津。云云。と太宰府の國史に見ゆるは。是を始とす。是に由て之を觀れば。始て之を置きしは。猶ほ久遠ならん。蓋し此府を置き。西方の藩鎭とし。以て外寇防禦に備へたるものなり。奈良の朝に至り。一旦之を廢して復た置きしこと。續日本紀に載せり。其位置は。今の觀世音寺の西に在り。今を距ること百年前。巨大なる礎石を。田塍の間に見る。貞享中。觀世音寺を再興することありしとき。其礎石を採りて之を用ゐたりと云ふ。畢りて。廟の後に至れば。花圃を設け。數百株の菊を植う。花方に開き。淸香馥郁。大に雅致を覺ふ。其東に小瀑布あり。寶滿山より濺ぎ來り。此に至て池を成す。此の處。已に寶滿山の麓に屬す。寶滿山。別に竈門山と稱す。嶺に至る。凡そ一里有半にして。路甚た險惡なり。嶺に神社あり。玉依姫を祭る。嶺に至れば眺望遠闊。兩筑二肥を眼下に集め。西北遙に壹岐對馬を見ると云ふ。小林教授。三角柱羅鍼盤を携へ。山の絶頂に登り。其高低を測らんと欲せしに。大雨に逢ふて果さず。既にして。神宮。社の藏物を廟の後殿に列し。之を觀せしむ。今其重なる者を擧れば。菅公の佩刀。及公の眞跡。吉備公唐に得し所の孔顏閔の銅像。其他名工三條宗近。吉光。正宗等の劍。五六口等なり。又神官西高辻男爵の意を以て。職員生徒に。神酒を給せり。時に雨猶ほ蕭々として。未た歇まず。教員數名。勇を皷し。生徒を師ゐて。往て都府樓の遺址等を訪へり。遺址は太宰府遺址の北に在り。天智天皇の時。始めて之を建てられし者と云ふ。其礎石今尙ほ數十あり。皆大抵方六尺餘にして柱を安置せし處。徑二尺餘あり。其樓の宏壯。想ふ可し。遺趾の傍。今尙ほ樓瓦の殘缺を得る者あり。以て硯と爲すときは。精確鐵の如し。世之を貯ふる者。往々之あり。菅公の詩に。都府樓纔看瓦色と。此瓦是なり。遂に又觀世音寺に詣る。此寺は。天智天皇。其母帝。齊明天皇の幸福を祈る爲めに建てられし者なり。但し數朝を經て。奈良の朝に至て。始て竣功せしと云ふ。其大伽藍たる。以て知る

可し。後四百年を經て。冷泉天皇。康平年中。火災ありて。悉く烏有に屬せし。治曆中。再び築さしと雖も。其規摸。昔時の十一に及ばず。此より厥後。屢々火災に罹り。興廢一ならず。今の現存する者は。蓋し貞享中の造營に係る。昔時此寺樓に懸けゑ所の鐘。今之を安樂寺に置けり。菅公の詩よ觀音寺獨聽鐘聲と。此鐘是なり。安樂寺は今菅廟の在る所なり。午後二時。皆復た太宰府に集れり。乃ち歸途に就き。二日市に至り。二時五十分。復た瀛車に上る。磷々轆々の際。覺へず久留米市に達す。乃ち宿す。明善校長後藤謙。來りて校長を訪ひ。旅中の勞を慰して歸れり。此夜。晴る

○十二日。晴。午前七時三十分。久留米を發し。午后三十分。柳川驛に達す。往て柳川尋常中學橘蔭館を觀る。館員池邊節松。岡元輔等。及生徒一般。館門の內よ迎ふ。館內に導き。職員に茶菓の供あり。此日故ありて。午後の授業を休す。故を以て參觀するを得ず。頗る遺憾に屬せり。櫻井教授。館員に問ふに。現今各級に用ふる所の教科書を以てせり。館員の答に據り。課業程度の大略を認知するを得たり。既に旅館に歸れば。池邊節松。岡元輔。其他の校員。來訪せり。教育の事務を談ずる少時にゑて。辭し去れり。

○十三日。晴。午前六時。柳川を發す。南行里餘にゑて。中嶋川を渡る。矢部川の末流なり。右に捷路を取り。海に沿ひ。堤防を涉りて。行くこと二里。黑崎山に至る。山を踰ゆれば。西南望。筑紫海を得たり。一里にして大牟田驛に達す。時方に正午なり。處々國旗を揭ぐるを見る。蓋し我が一行を祝するもの。此地石炭坑を以て名あり。其社員。團琢磨。林英夫。小山篤等。我が職員を招きて。午飯を供せり。飯後職員生徒一同。社員の誘導を以て。往きて炭坑に屬する蒸瀛機關を觀たり。又遂に坑內に入り。以て採掘の業事を觀る。既にゑて本郡教育會員。相謀りて。煙火十餘を發揚し。亦以て我が一行を祝したり此

夜。團氏等。我が職員一同を其邸に延き。饗宴を設け。以て旅中の勞を慰す。午後九時。旅館に歸る。

○十四日。晴。午前六時三十分を以て發し。東。間道を經て。三里にして。府本驛に至り。午飯す。驛の南。丘隅起伏するを。金山と曰ふ。此に於て。生徒をして發火演習を爲さしめんと欲す。乃ち豫科生八名。補充生二十人を分離して。假設敵兵と定め。前野助教授之を帥ゐて。先發し。要衝の地よ據りて。以て本軍の進擊を待つ。本軍は則ち分れて三隊とあり。一小隊を以て前衛とし。三小隊を以て本隊とす。本隊の一分隊を割き。以て後衛とせり。部署既に定まり。本軍撒兵を爲して進行す。秋山助教授之を帥ふ。行くこと半里にして。敵兵を樹間に見る。即ち令して發射せしむ。敵亦之に應ず。銃戰稍久し。本軍の一隊。左方の陵に上り。不意に敵の右偏を亂射す。敵之が爲めに少く擾る。正面の本軍。之よ乘じて益々發射し。敵も亦之を拒ぎ黑雲兩軍の間に塡塞し。殆ど咫尺を辨せず。此時に乘じて。本軍の補充生拔刀隊。一度に拔き連れ。煙を破り敵營を斫る。敵の拔刀隊。亦之を防ぎ。相鬪ふこと良久さ。既にして休戰の喇叭忽ち起り。即ち罷む。戰狀實に壯快ありき。終て再び集合し。列を成して路を南方に取り。二里餘にして高瀨驛に達す。先發者志水余田二氏。待ちて此に在り。驛中。每戶。亦國旗を揭げ。以て我が行を祝す。旭影翻々として。一見殆ど大祭日の如し。此日。高瀨高等小學校教員等。生徒數百人を引率し。隊伍を成し。校旗を翻し。我一行を金山に來り迎へ。遂に我行に從て高瀨に至れり。又郡中諸の尋常小學校教員も。亦各其生徒數百人を引き。各校旗を樹て。驛の北方に整列し。以て我行を迎へたり。而して郡長新美某。鮮魚數百尾を贈り。以て一行の勞を慰せり。又驛の藥商津田昌磋。棘鬣魚長三尺なる者を職員に。別に饅頭一千顆を。生徒に寄贈したり。昌磋一男あり。名を敬儀と曰ふ。今秋。我が校に入り。日夜勤勉怠らざりしに。嚮さに。疾を獲て。蓐に在ること數日にして。遂に起きざりし。年十七。

昌磋慟哭數日を經て已まずと云ふ。今を距ること僅に十餘日前あり。故に敬儀の未た疾に罹らざるや。奮て此般の旅行に從はんと欲し。準備の資を鄉里の父母よ報告し。以て發程の期を俟てり。而して今や則ち幽明路を異にす。豈哀しからずや。此日昌磋我が一行の驛中に至るを見て。感々焉として。泣て謂らく。哀哉。吾兒を此行伍の中に見ること能はずと。昌磋今の贈り物あるは。子を追思するの切なると。一行に向て子の爲めに謝意を表するに由れる歟。敬儀の墓は。驛の某寺中に在りと聞く。皆明晨發程の期を以て。將に路を枉て往て之を弔せんとす。此夜。校長。及教員某々。相議して。金若干を昌磋に贈て。以て弔儀を表す。

○十五日。晴。午前六時。旅館を出づ。驛の中央稍北に。寺あり。即ち敬儀の墓の在る所あり。天未だ明けざるを以て。寺門に揭ぐるに。球燈を以てす。門に入れば。敬儀の父昌磋。禮服を着け。以て一行を迎ふ。壇上に敬儀の神主を安す。生徒皆其前面に整列し。捧銃の式を爲し。以て弔意を表す。同時に。弔悼の喇叭を發す。音節悽悲。人をして慘然たらしむ。昌磋。嗚咽泣を飲む。墓は堂の東數歩に在り。亦拜して去る。乃ち東。高瀨橋を渡り。右に轉じて。吉次越の間道に向ふ。行くこと半里にして。路山間に入る。少しく東して。山驛あり。人家百餘煙。原倉村と曰ふ。村を過ぎ。路又上るを延山越と曰ふ。風景極めて佳なり。遠く筑紫海を隔てゝ。雲仙嶽及太良嶽を見る。翠色黛の如し。而して白雲一帶。仙嶽の腰を擁して。太良の頭を蔽へり。俚諺に曰く。雲仙腰帶太良巾と。蓋し二嶽高低の差を言ふもの。今や其眞を寫すを見るを得たり。一村落を山の南に下し眺むを。尾田村と曰ふ。其西。平田万頃。其間に大渠あり。斗折蛇行して西するを。尾田池と名く。藩治の時。以て養魚の處とす。嶺を下りて。路稍平かに。老松路を夾みて列を成す。宛も東海道小夜山中の景に似たり。古人の詩に。亦言へることあり。蓋し此

を指す歟。一里許にして路復た上り更に嶮なるを。吉次越とす。丁丑の役。激戰の地にして。路傍の樹身。今尙ほ彈丸の痕を認む。南五町にして。地名六本楠と云ふあり。賊將篠原國幹。銃丸に斃れ玄處と云ふ。所謂田原坂は。北一里にあり。嶺を。下れば。路歩々卑きに就き。遙に東北の山を見る。其間に突兀たる者は。矢筈嶽とす。前日之を右方に觀て。山鹿驛に入るもの。須臾にして路田塍平坦の中に入る。東南に。山色蒼々として横はるを見る。卽ち立田山にして。我校は其南麓に在り。山色依々。我一行を招くものに似たり。行くこと凡三四里にして。始めて官道。熊本市を距ること一里有半の處に出づ。生徒一般。軍歌を唱へつゝ。熊本に入る。午後三時三十分。一同恙なく歸校したり。椿幹事。之を中門の外より迎へて。勞を慰す。乃ち生徒一同。彎形を成して。本校の前庭に整列す。校長短簡なる慰勞の辭を告示す。生徒一同。捧銃式を以て。敬禮を表し。皆意氣勇壯。大喊一聲。以て開散せり。（完）

編者曰く兩筑修學旅行に關し園助教授の作に係る軍歌あり當時往々都會の雜誌に現はれて愛翫せられたり今文苑に收めたれば就て覽られよ

魯韓蹈雲錄

助教授　矢津昌永

余久しく外遊の志あり而して先づ東洋各國よりして漸次西部に及ぼさんとは是れ余が素志ありき明治廿六年夏期休暇を得たり是に於て先づ朝鮮に渡航し其人情風物を探り次で西伯利に遊ぶことに決し旅裝匆々僅に一囊一傘單身飄然として爰に外遊第一着の途に上るに至れり

七月二十四日池田驛一番發瀛車（五時四十九分）にて出發す余昨夜前途旅行の計畫に就き能く熟眠せざりしを以て曉來僅に一睡すれば時間既に迫る別を家人に告げ匆々池田驛に至れば恰も好し間もなく春日